

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 3 6 0 1 2 3 4 5



始



8
222

旅

乃

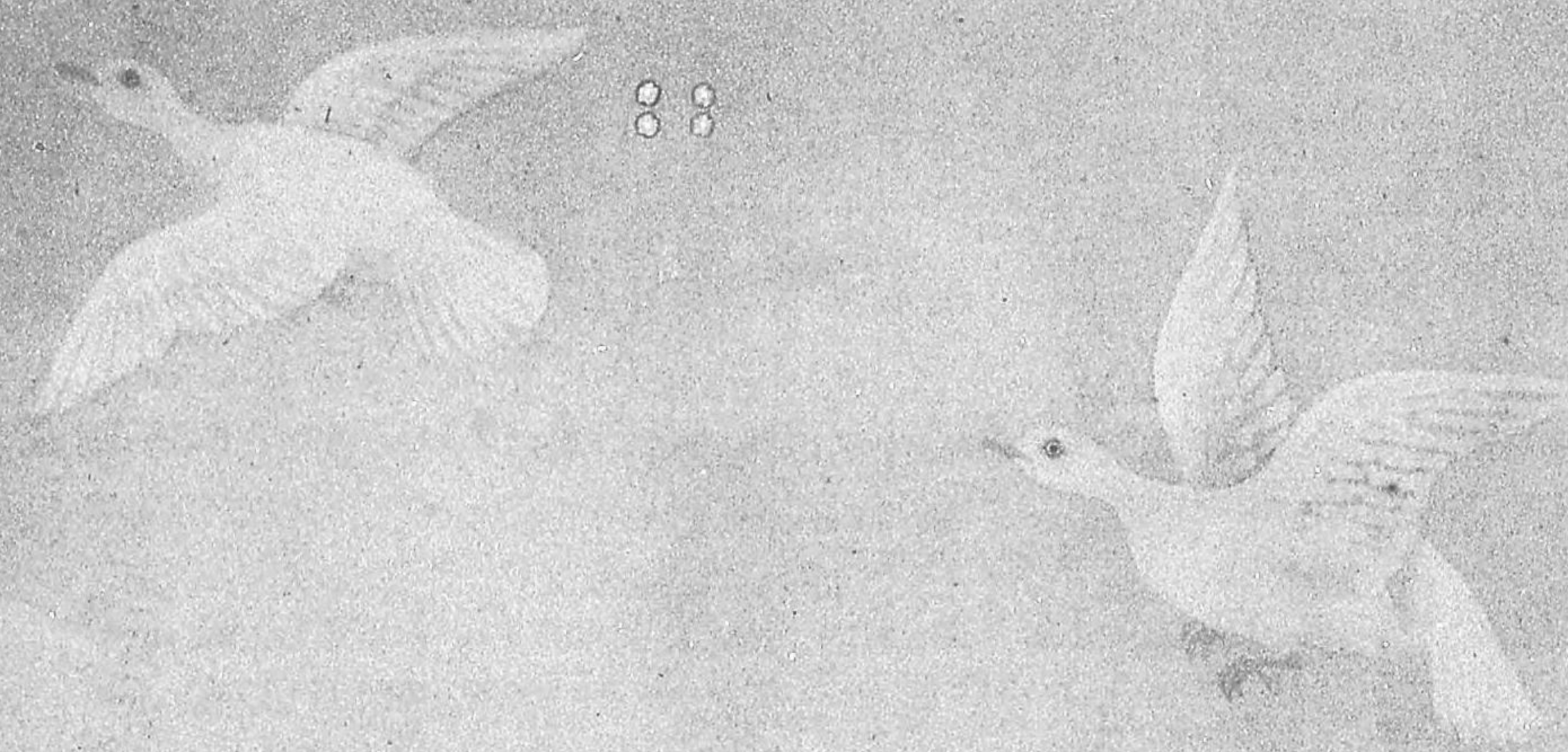
家

伊豆

伊豆の巻



春
空
雁



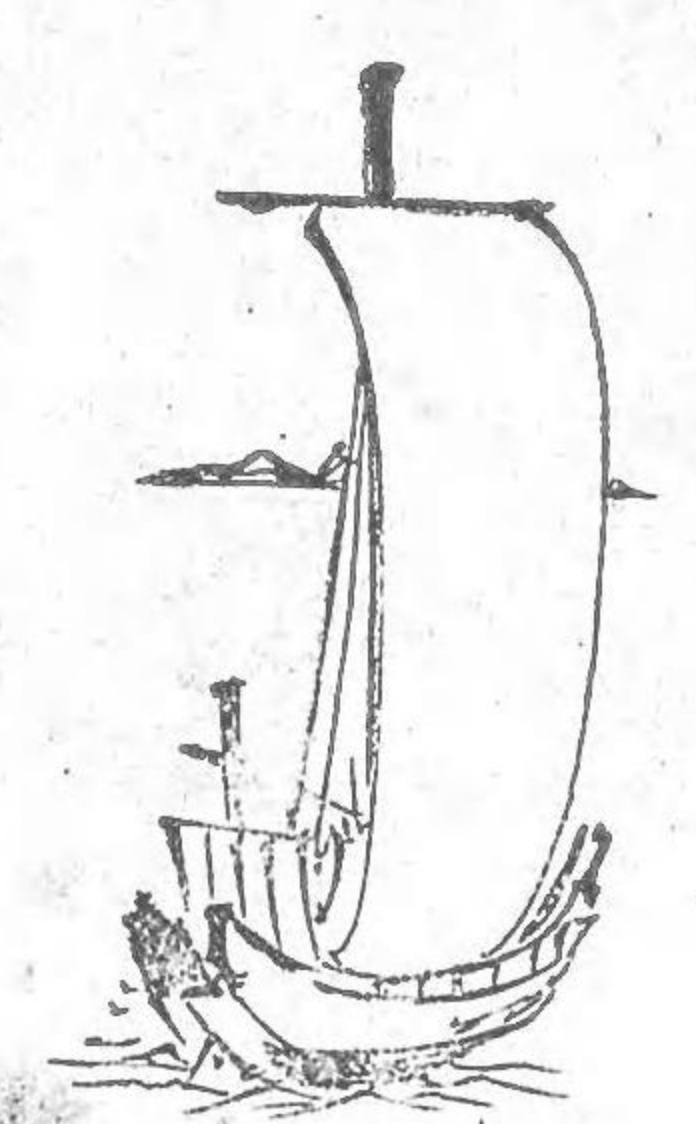
並にちりり

入り来る雁

雁も外丁

雁のやすの

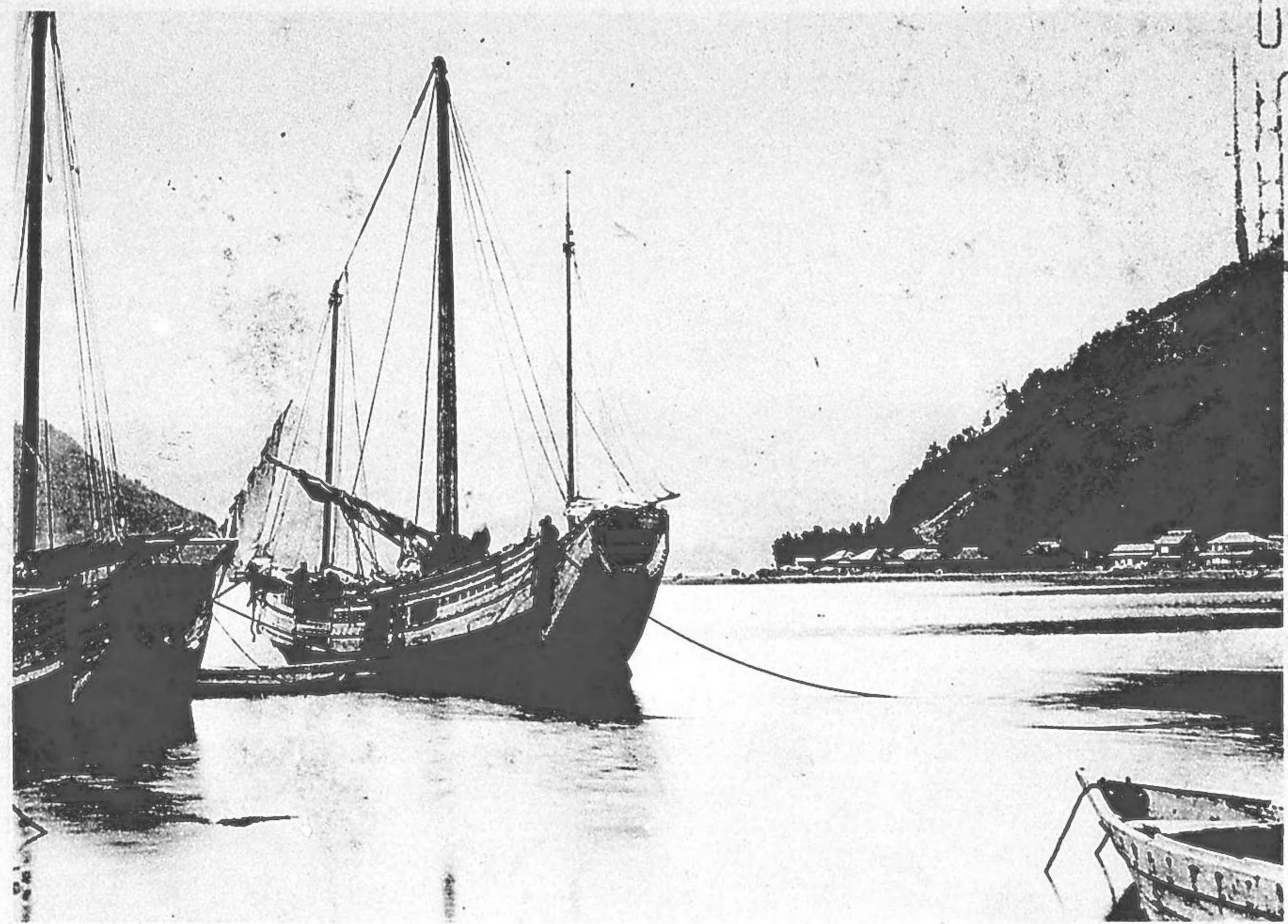
ふさひす



こゝろ

あじの雁の親心す田
千歳百世出るさし入る

江の船巻

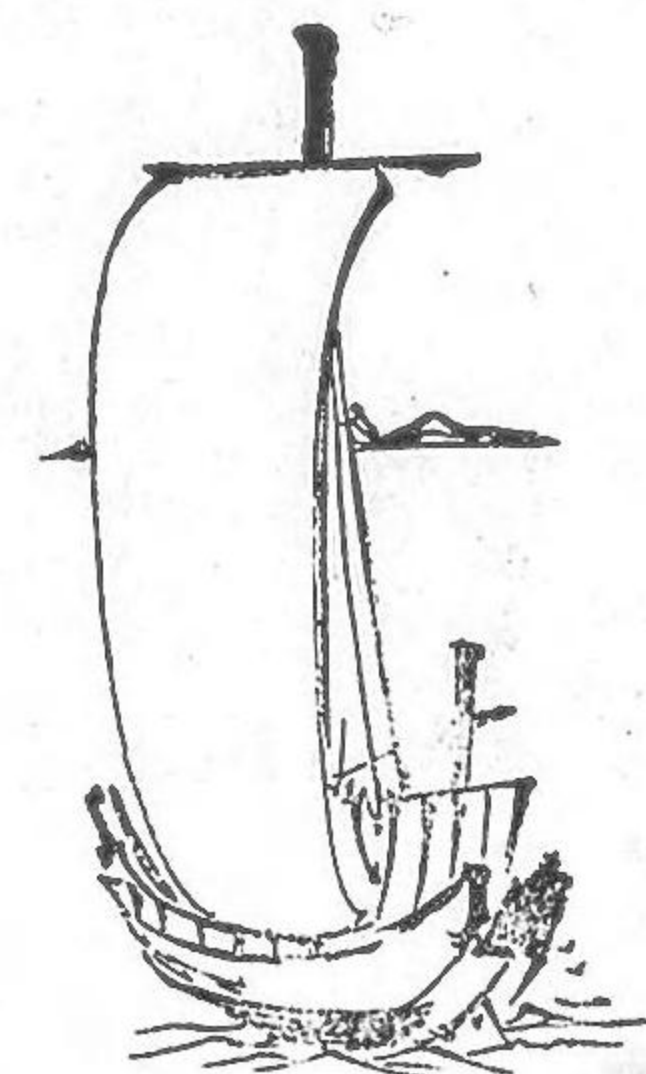


日本郵政
郵便

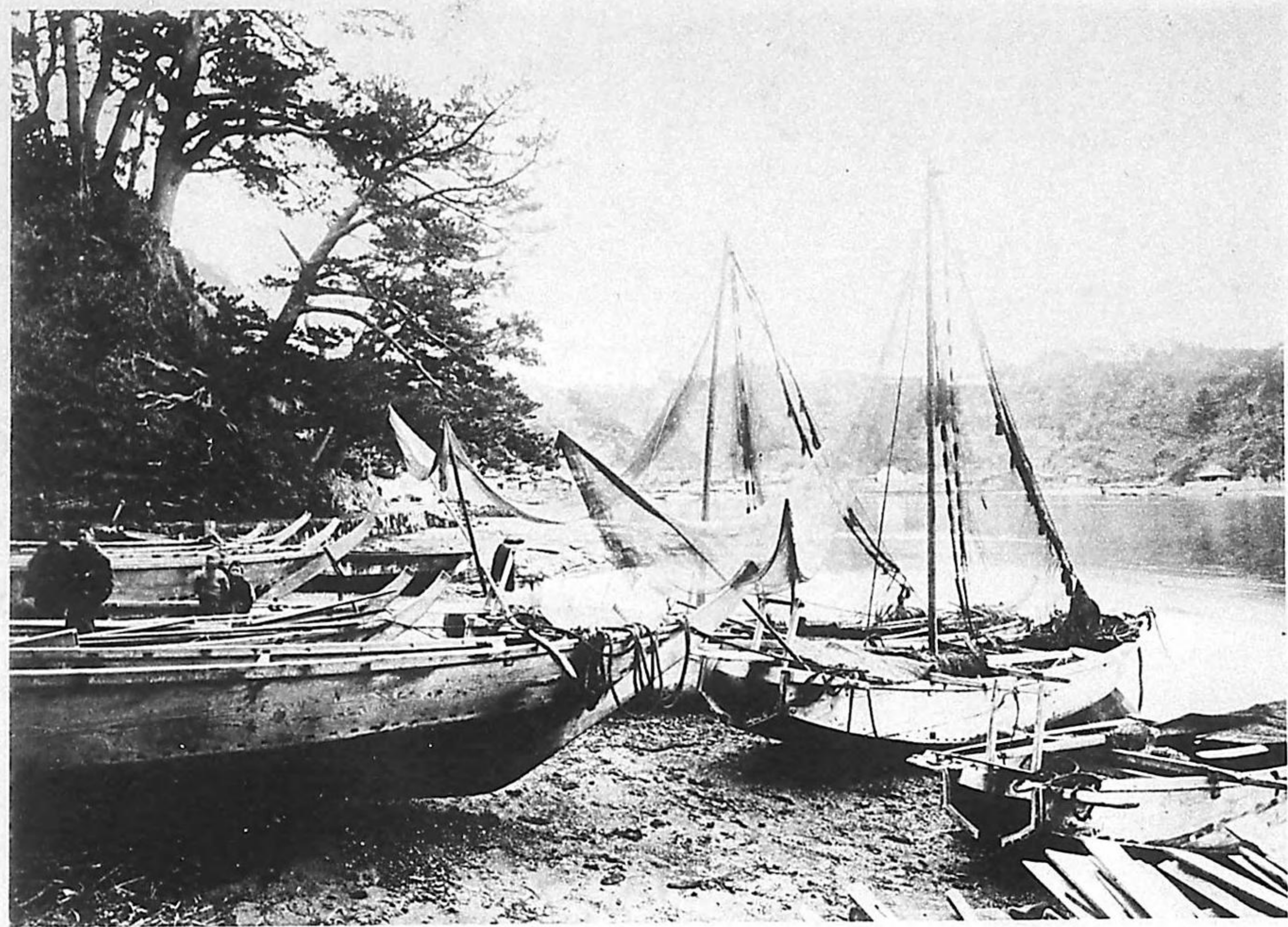


江の浦港

千船百舟出るあり入る
あり江の浦の賑ひ下田
に亞げり



うちわたす
沖のかすみの
隙もれて
入り来る船は
近づきにけり



多
比
濱

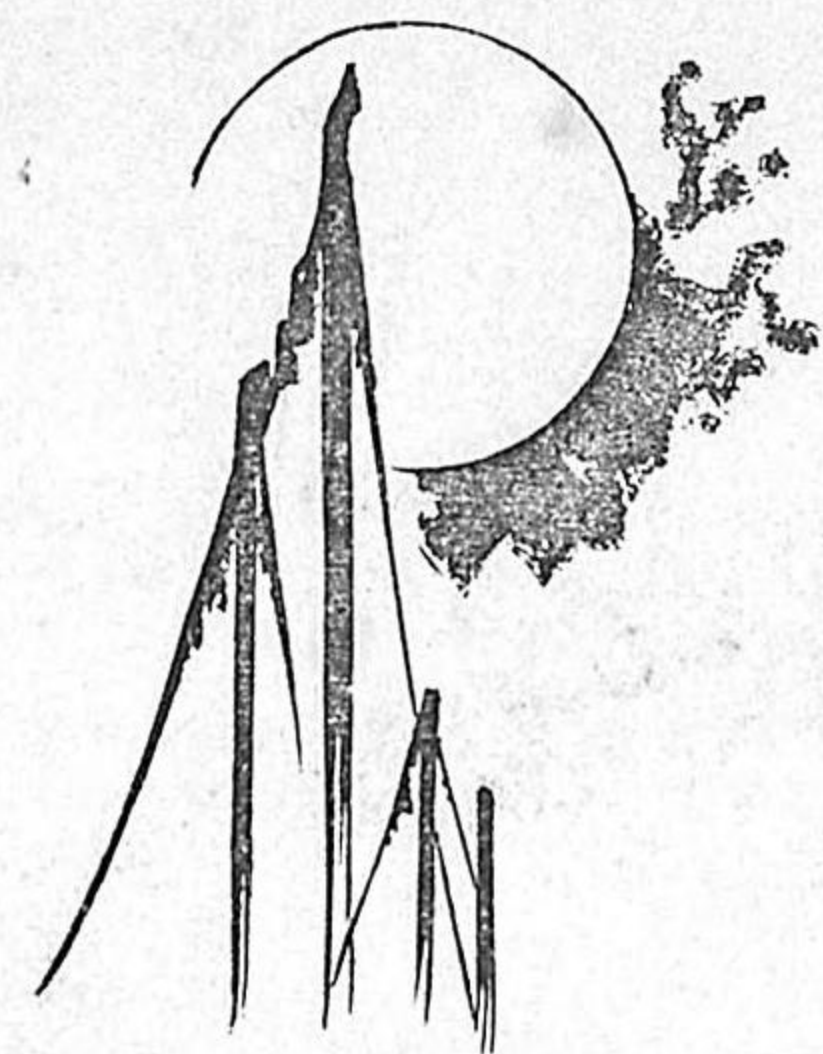
風きよき

濱への舟の

波まくら

夢も涼しき

心地こそすれ



我が里の燈も

ながめけり月の舟

狩野川橋



水源天城山より發し田
方郡に至りて湯島川と
なり猫兒川を合せて北
流し下狩野にて大見修
善寺の二川を容れ田中
菫山を経て君澤郡に至
り境川に會して駿州沼
津の海に注ぐ是を狩野
川と總稱す



神樂岩

岩戸開きに八百万神寄

り集ひ天鈿女命が手に

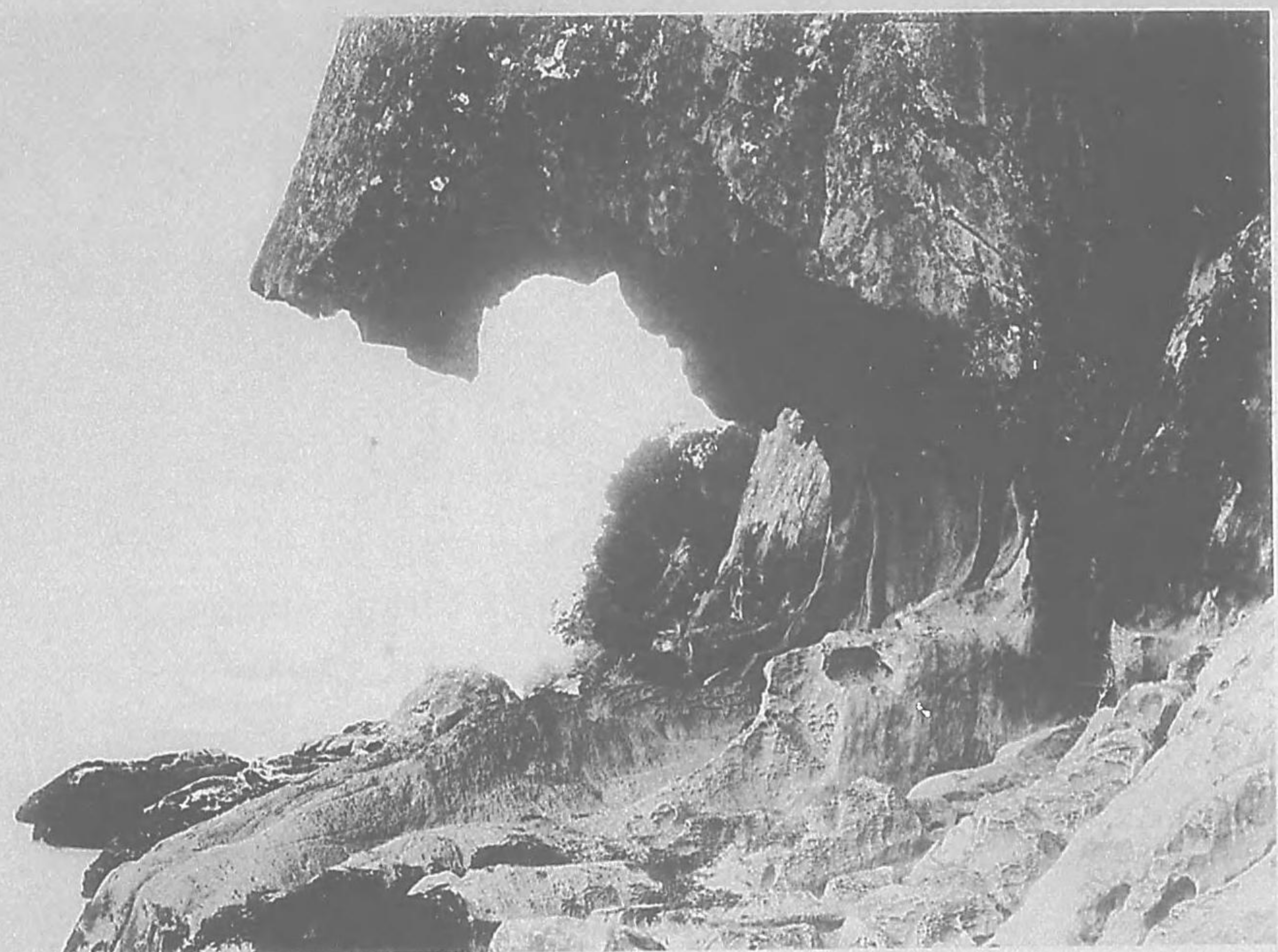
笹の葉探りもちて舞ひ

かなでたる神樂と名に

おへる此岩を見ればあ

なおもしろあな樂しと

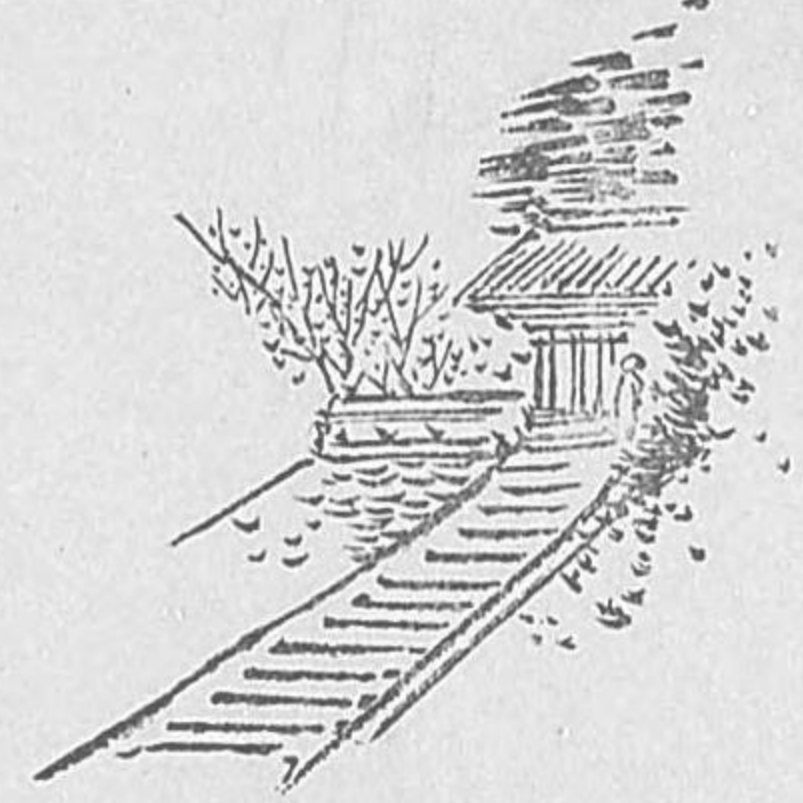
我も歌ひ出ん



三島神社

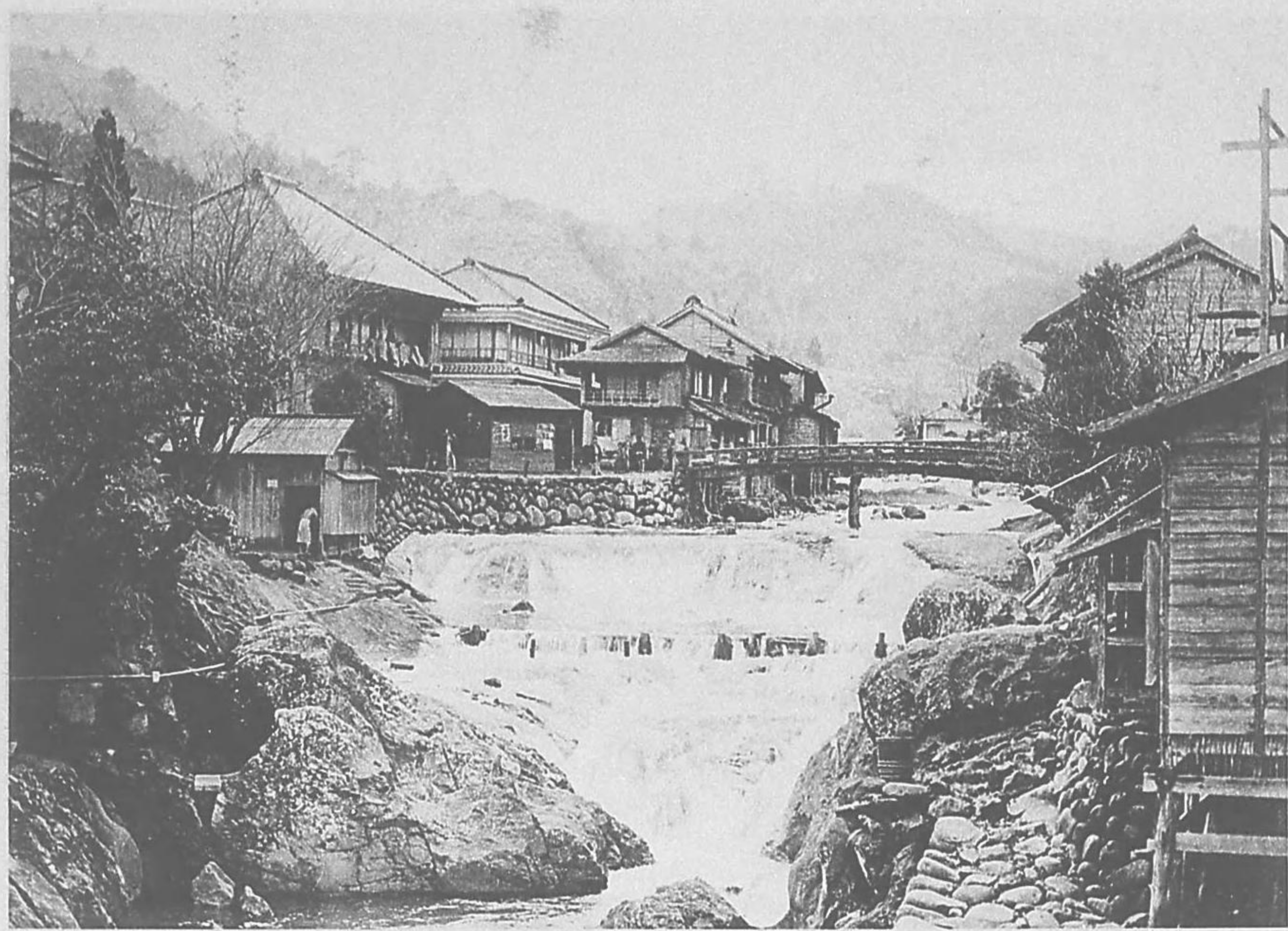
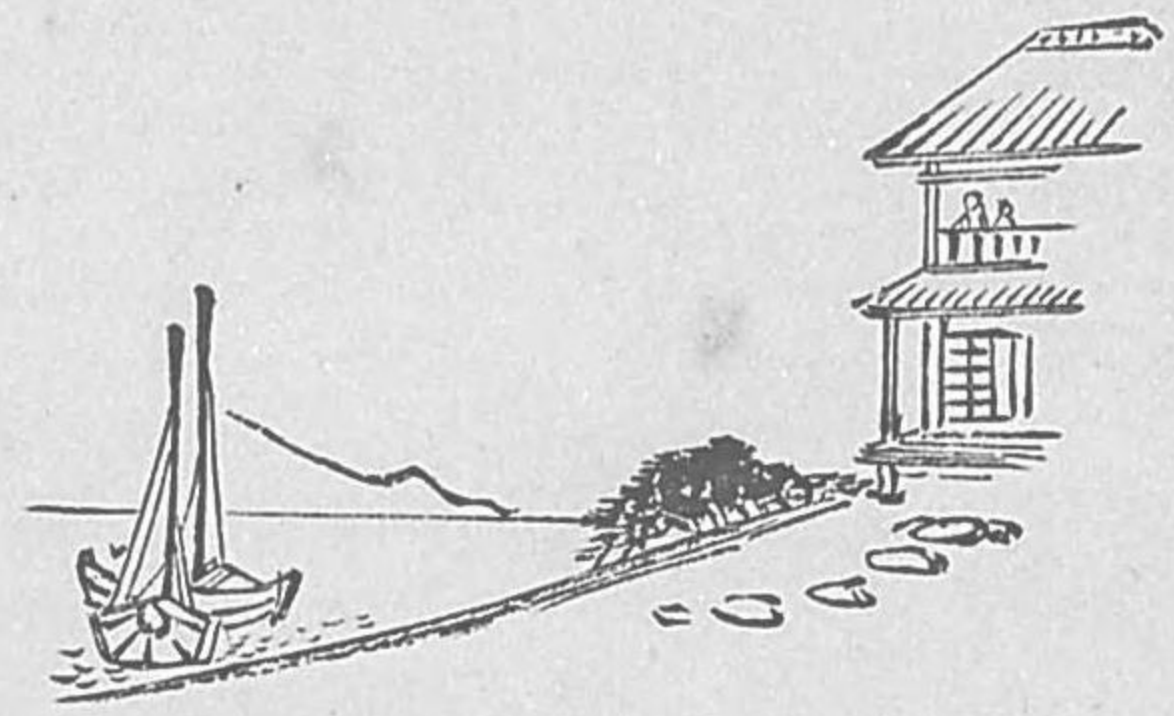
三島は東海道有名の驛にて
箱根嶺の西麓に在り神社は
官幣大社にて大山祇命を奉
祀す

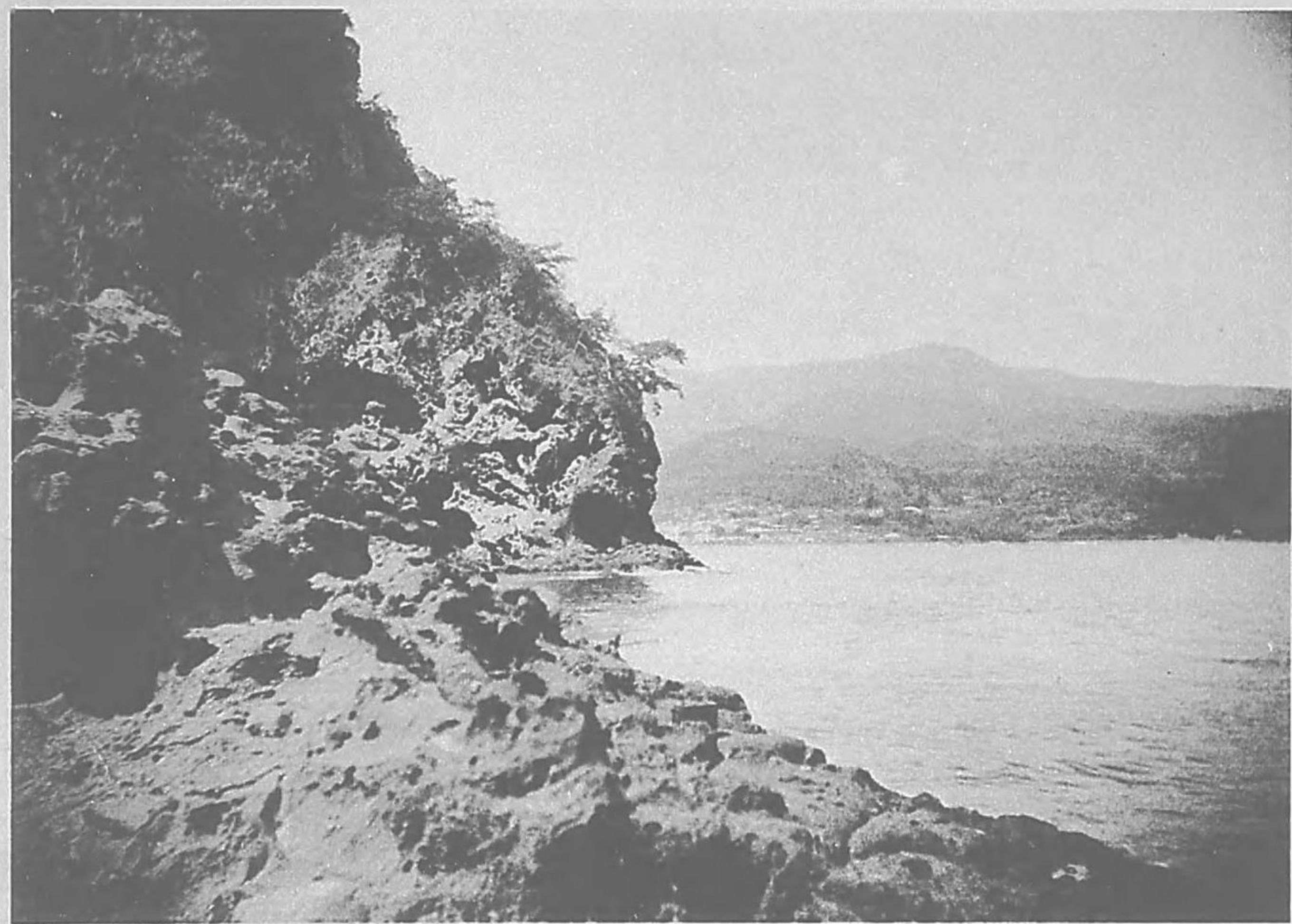
伊豆の三島の神
風も吹收むべき
世のはじめ幾久
しさとも限らじ
な嘉辰令月とは
此時を云ぞ目出たき



修善寺温泉

温泉の熱海と伯仲
なる事は世の知る
所なり修善寺は空
海大師の開基にて
密宗なりしが建長
年間宋人劉闌溪來
住せしより禪林と
なれり土地幽遠景
奇なり又蒲冠者範頼金吾頼家
等の古跡にて歴史参考の一端
たる事多し



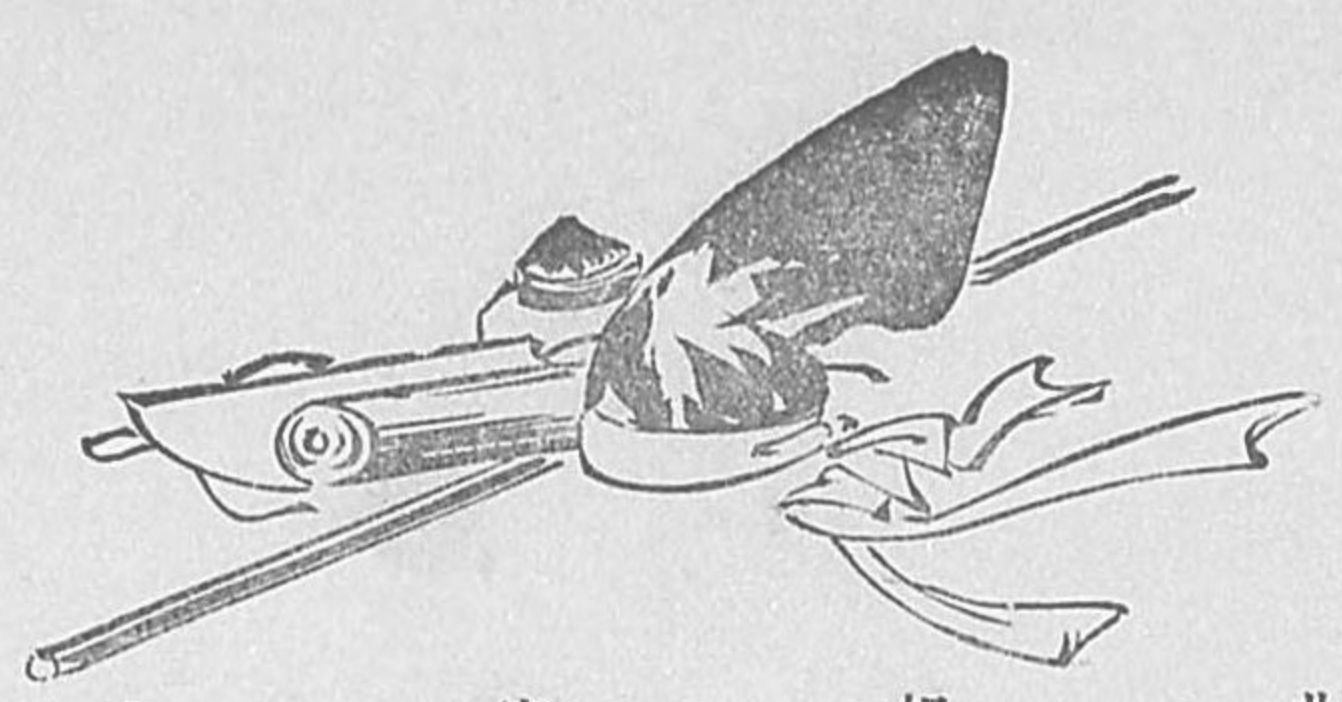


魚見崎より
熱海を望む



熱海に在りて熱海を
掌に入る、如くは眺
めがたし魚見崎より
目を屬すれば彼所こ
そ我が宿れる館なり
彼岸こそ我が散歩を
試むる所なりと數へ
られてをかし

魚見崎と兜岩



此崎より錦浦に至る

海岸すべて怪岩奇石

相断續す中にも鳥帽

子岩兜岩は公家と武

家との頭の飾藤原氏

源平二氏の寶物とも

すべくこそ

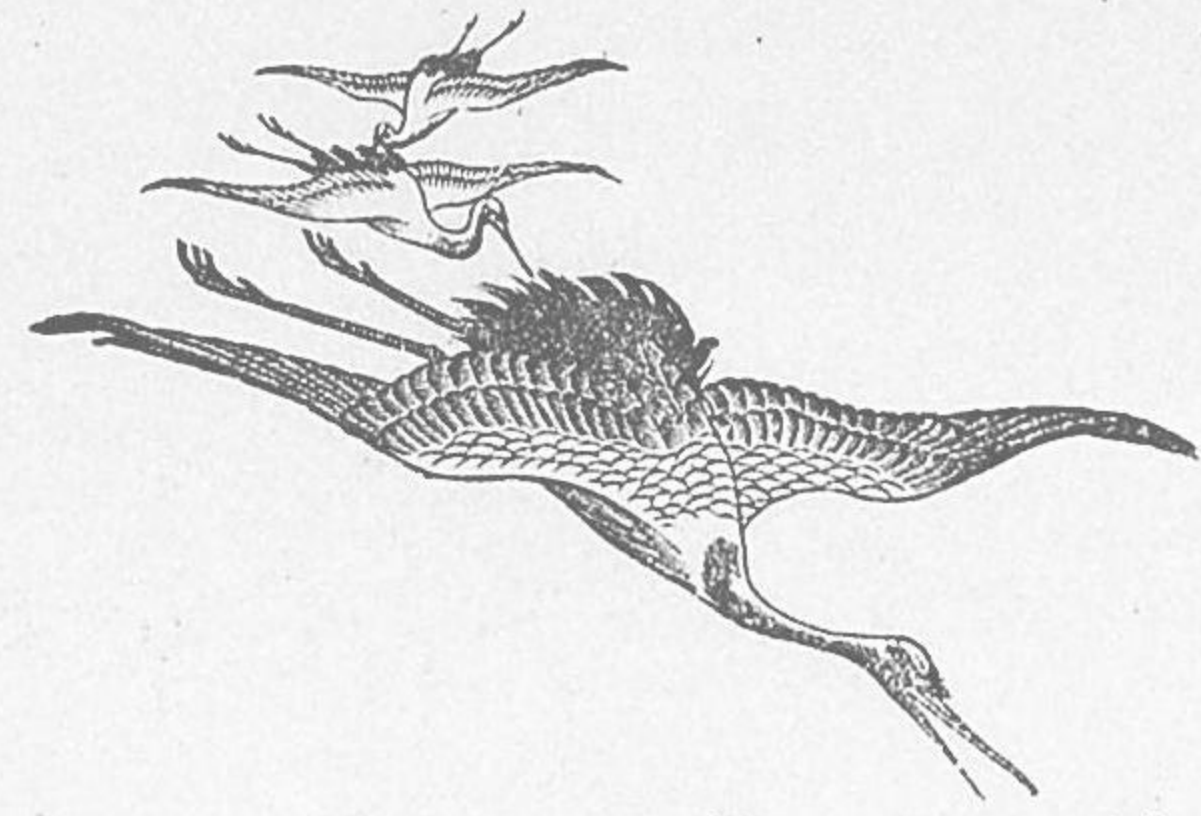
菖蒲草引て

添へまし兜岩





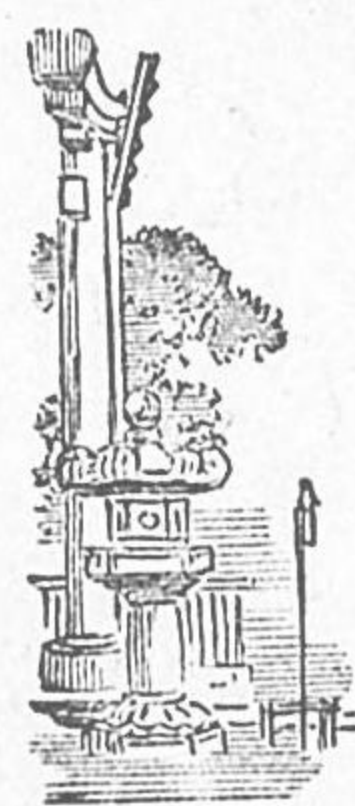
伊東より川奈崎
及四方島を望む



西南北の三方は山
を繞らし東一方は
海に面せる伊東の
風光遠近の島山を
手に取る如く殊に
旭光を迎ふるには
無双なり

引籠や朝日
受けたる涙の末

伊東祐親の墓

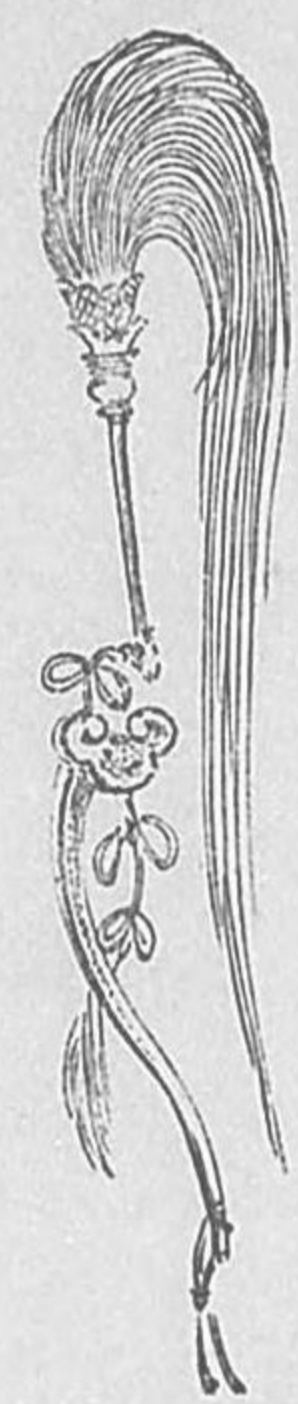


地蔵原山なる伊東祐親
の墓を見るにつけて思
ひ浮べるは其子祐清の
忠義其孫の祐成時致が
孝勇かくまで一門に名
士ありながら運命拙か
りし伊東氏こそ哀なれ
と祐親が剛情に由るか

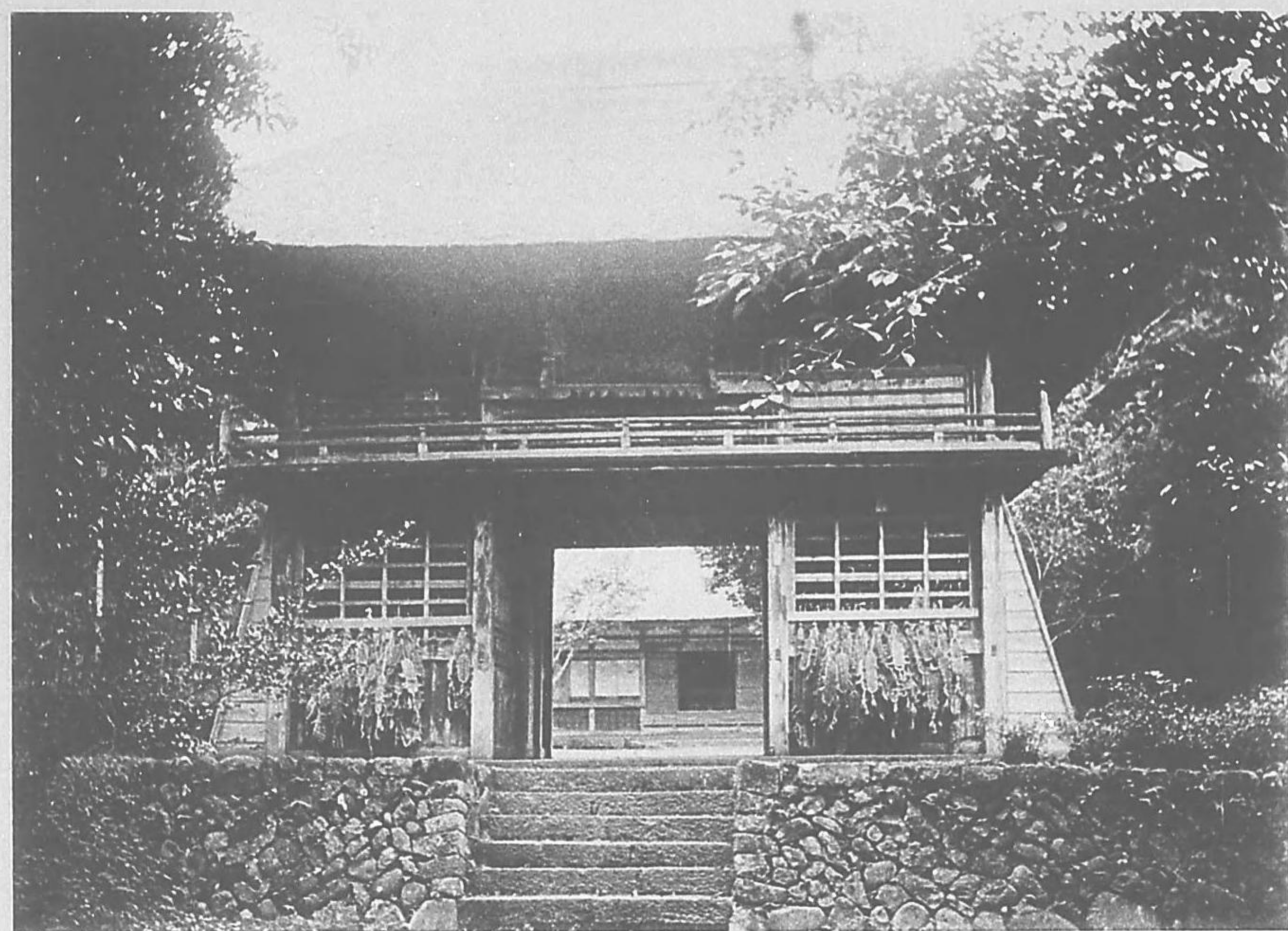


海光山佛規寺

海の光を山號とし佛の
規を寺に名づくる清淨
界門に入れば脱塵の思
ひあらしむ



慈悲大海の光もて
衆生の愚痴を照し
けり
佛の規に違はずば
現當二世もやすか
らん



組岩より水が崎を望む



前も岩後も岩左右皆岩
この岩中に立ちて見渡
せば唯洋々たる天地に
て島山各處に點出し其
身仙界に在る如し中に
も水が崎を一掬したる
は我が力のほごも神に
化したるならん



蠣崎辨天島より
奇岩を観る



さゞれ石のいはほこな

りて苔の蒸すまでと千

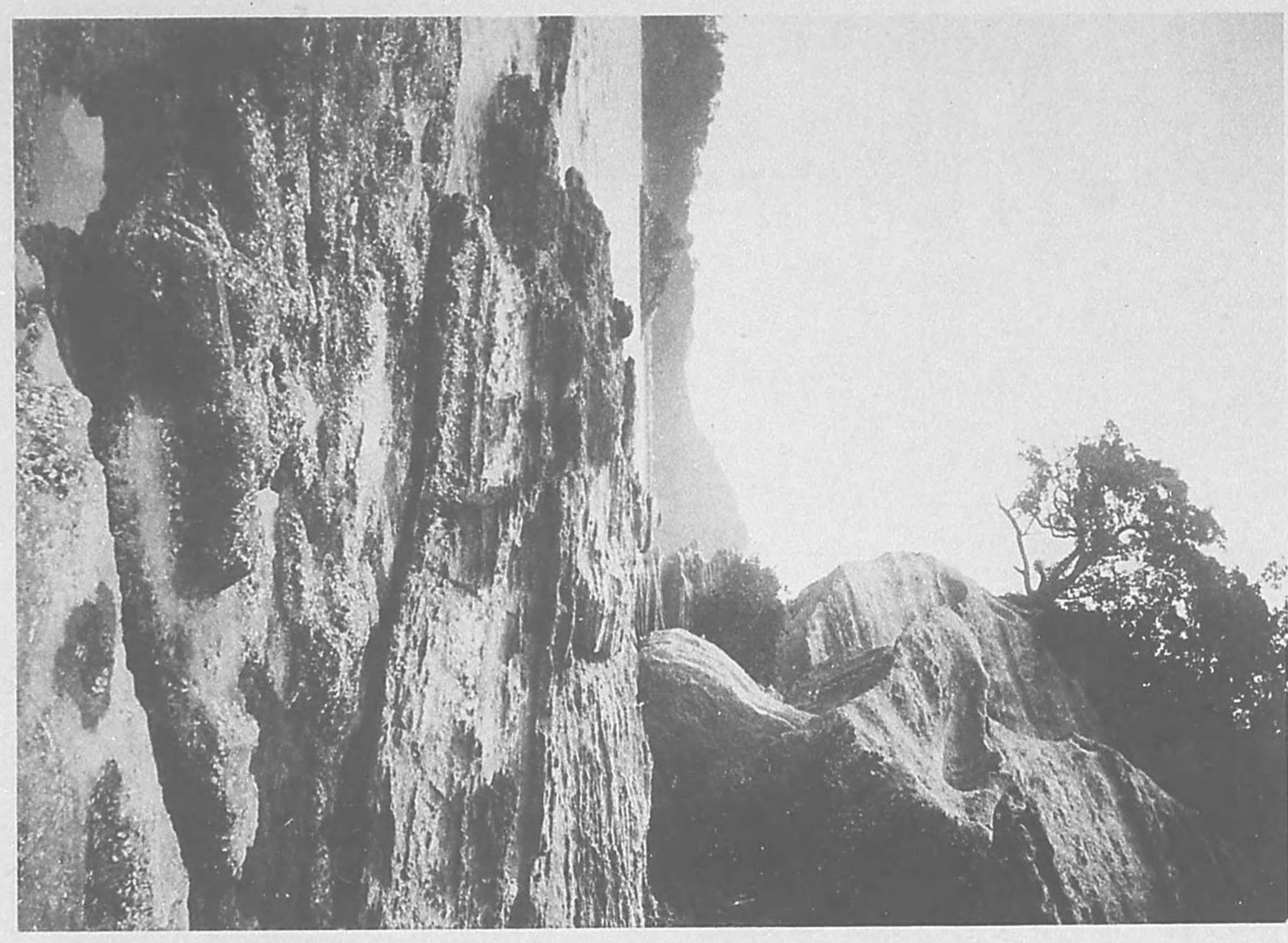
代を視ひてよめるもげ

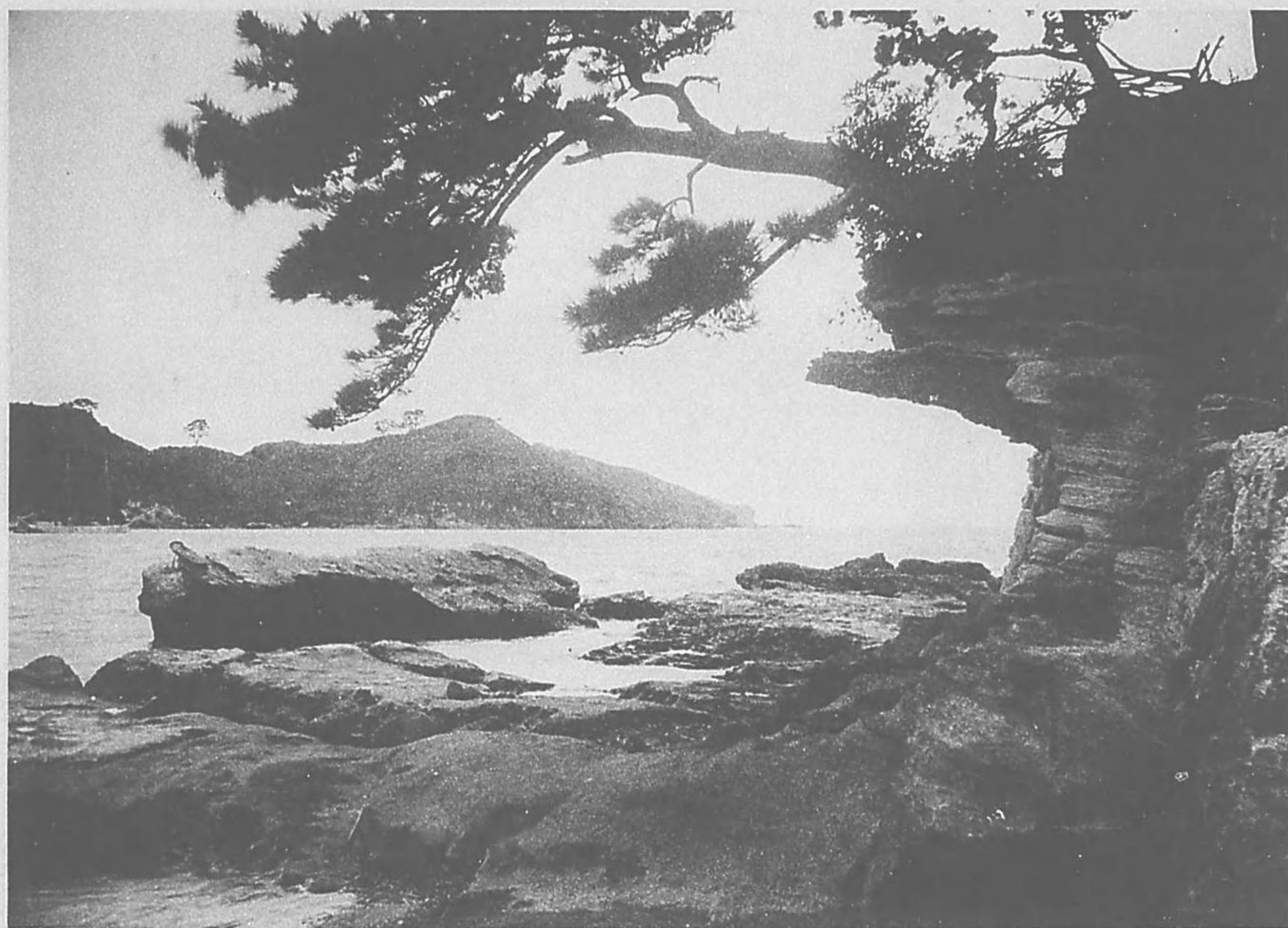
にさる事になん此のめ

づらしき岩は神代の磯

なりけんかくてなほ行

未幾万年を経らん





蠣崎辨天島より
洲崎を望む

口あたり

すつぱりするこ

だいくの

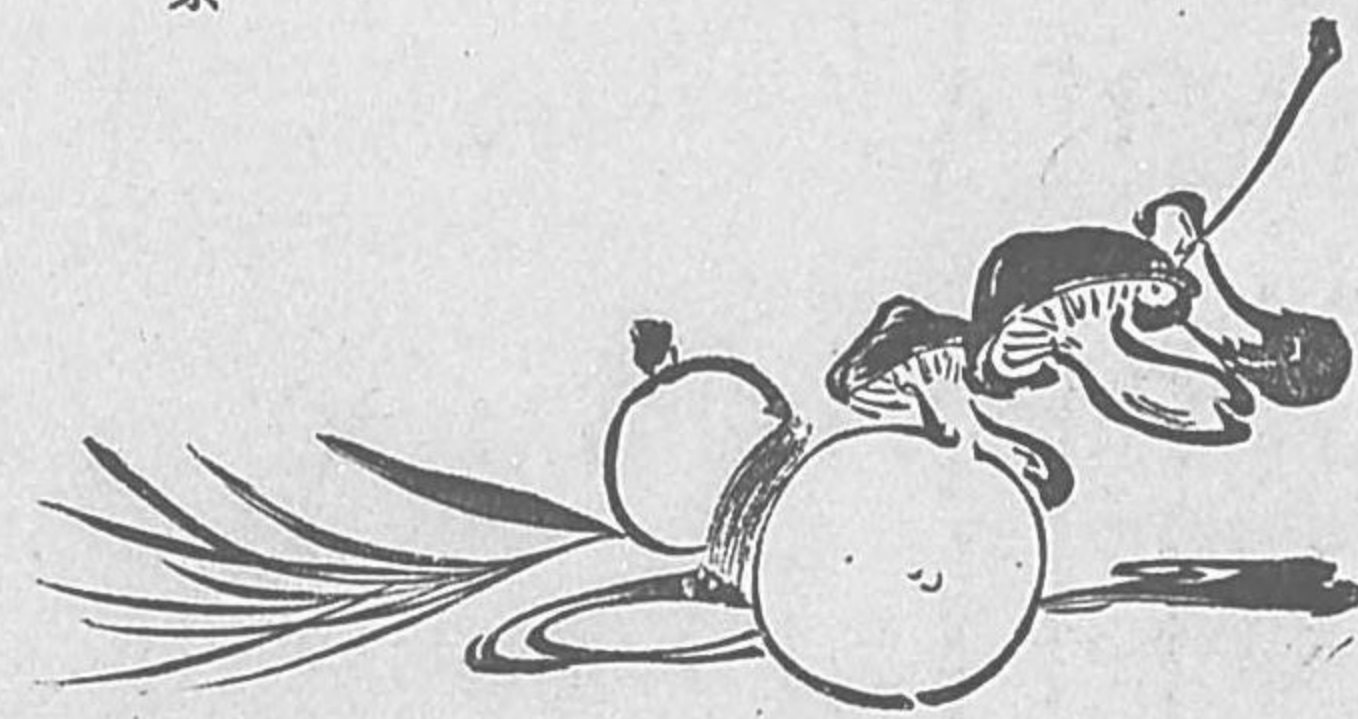
すさきとりあふ

蠣崎の景

こは酒飲の詠み出した

るなり下戸には雑炊こ

そ好むべけれ



蠣崎辨天島全景

松吹く風も磯打つ波も
琵琶の調に通ひたる辨
天島のけしき霞のあし
た霧のゆふべ神女もこ
ゝに天降り給ふかこあ
やしまる



四つ緒に

まがひて涼し

浪の音



赤根島群嶋

天公人間の耳目を慰め

んミにや洋中に群島を

造作し裝飾するに樹木

を以てし風と浪との響

に音楽を擬せしむ其賜

仰ぐべし喜ぶべし

✦
✦
✦
✦
✦

春秋を

いはぬ縁や

島の松



城山より
大良港を望む



山の巖より海原を眺め

わたすばかり愉快なる

ものは無し彼の港この

島など知るを指さし知

らぬを問ひ松の木の間

を沖の帆の潜りて楫に

のぼるなど言ひしらす

なかしうこそ



大瀬海岸より
神子元燈臺を望む

燈臺のみこもミ

暗くなりけり

海原てらす

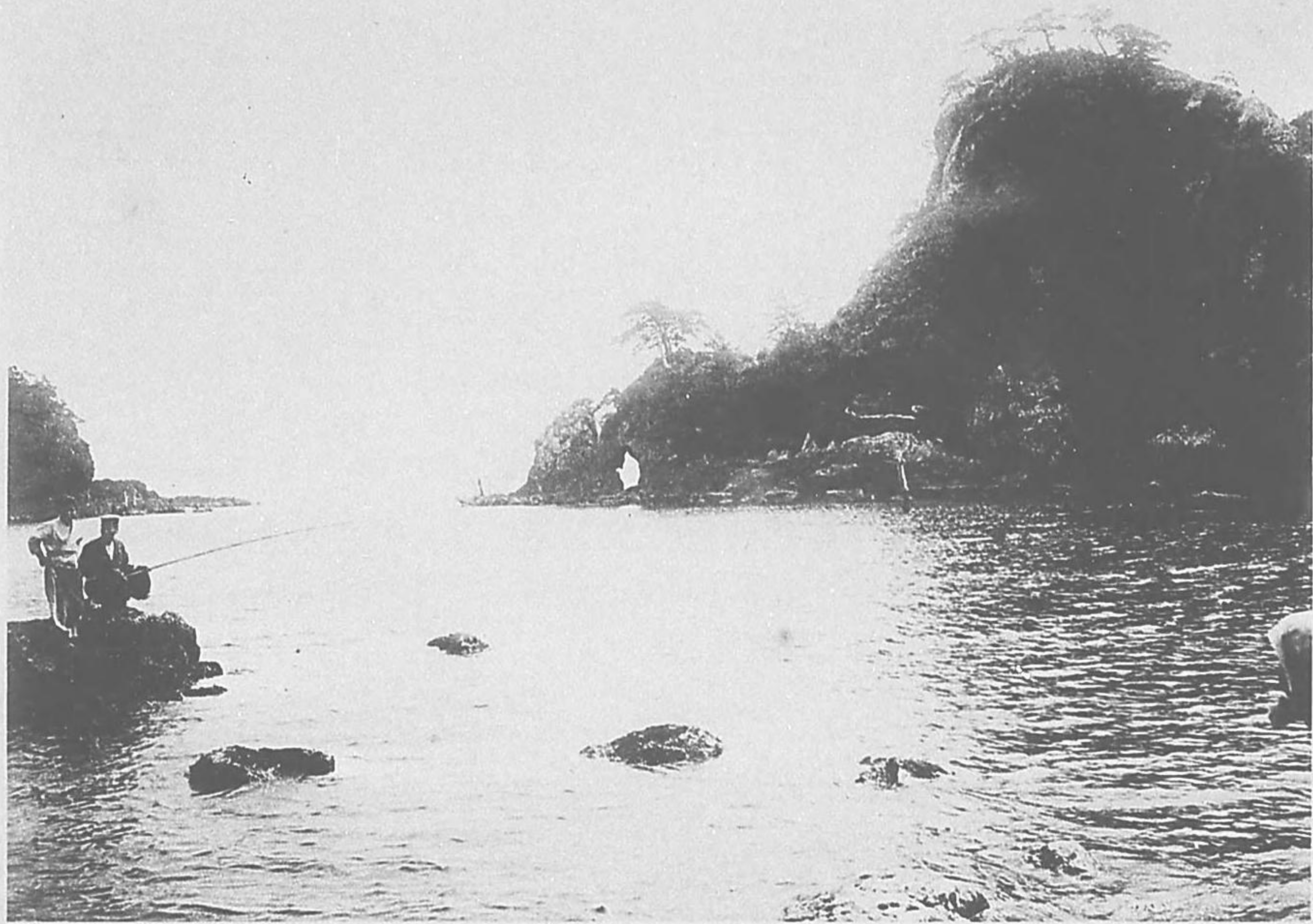
月のひかりに



長閑さや

眺めおほせの

岸日より



小稻村より大根島
及箕棧群島を望む

秋の日は殊に空澄み波
りて遙かなる所もよく
眺めらるれば此所の島
彼所の崎など指さして
數ふるほどに夕霧やう
くくに籠めて見ぬ隠れ
するも又をかし



小稻村海岸

潮 蹙 三 山 島

烟 橫 萬 里 沙

巖 樓 春 作 市

一 盪 鼓 暮 催 衙

片 曲 水 仙 操

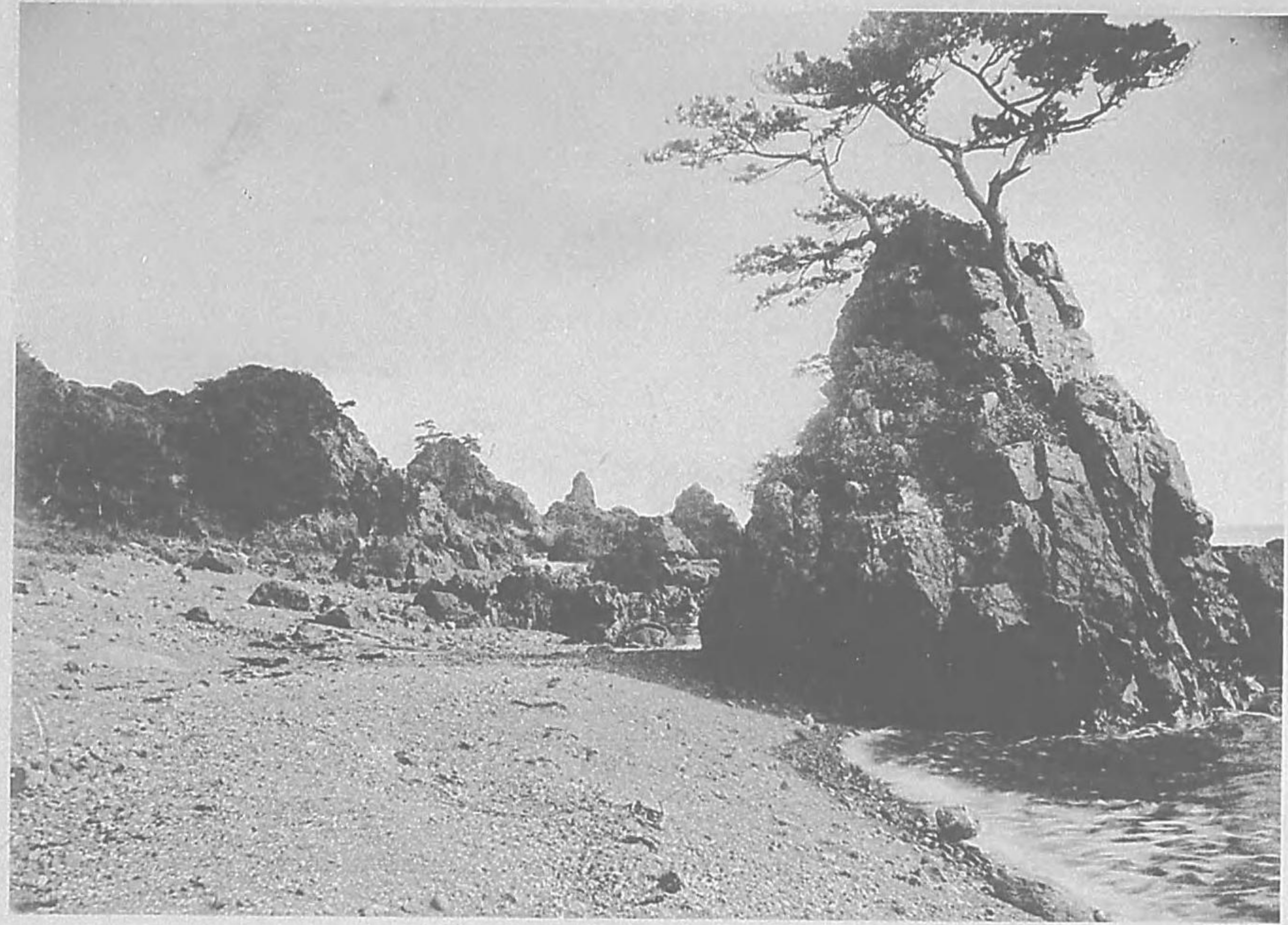
安 帆 漁 父 家

試 期 定 何 處

問 棗 如 瓜

金人劉迎詩





大根島



島中の風光人間と別な
り清の范周が
千頃廻淵萬藥含
碧空激澗散優曇
波翻柱魄輝當五
瀑點桃顯艶正三
と賦せしも宜なりや

島里も

春となりけり

魚の味



箕
椀
島

渺々たる海原を白沙も

て濡がける波さし屹立

せる島山を面白く据ゑ

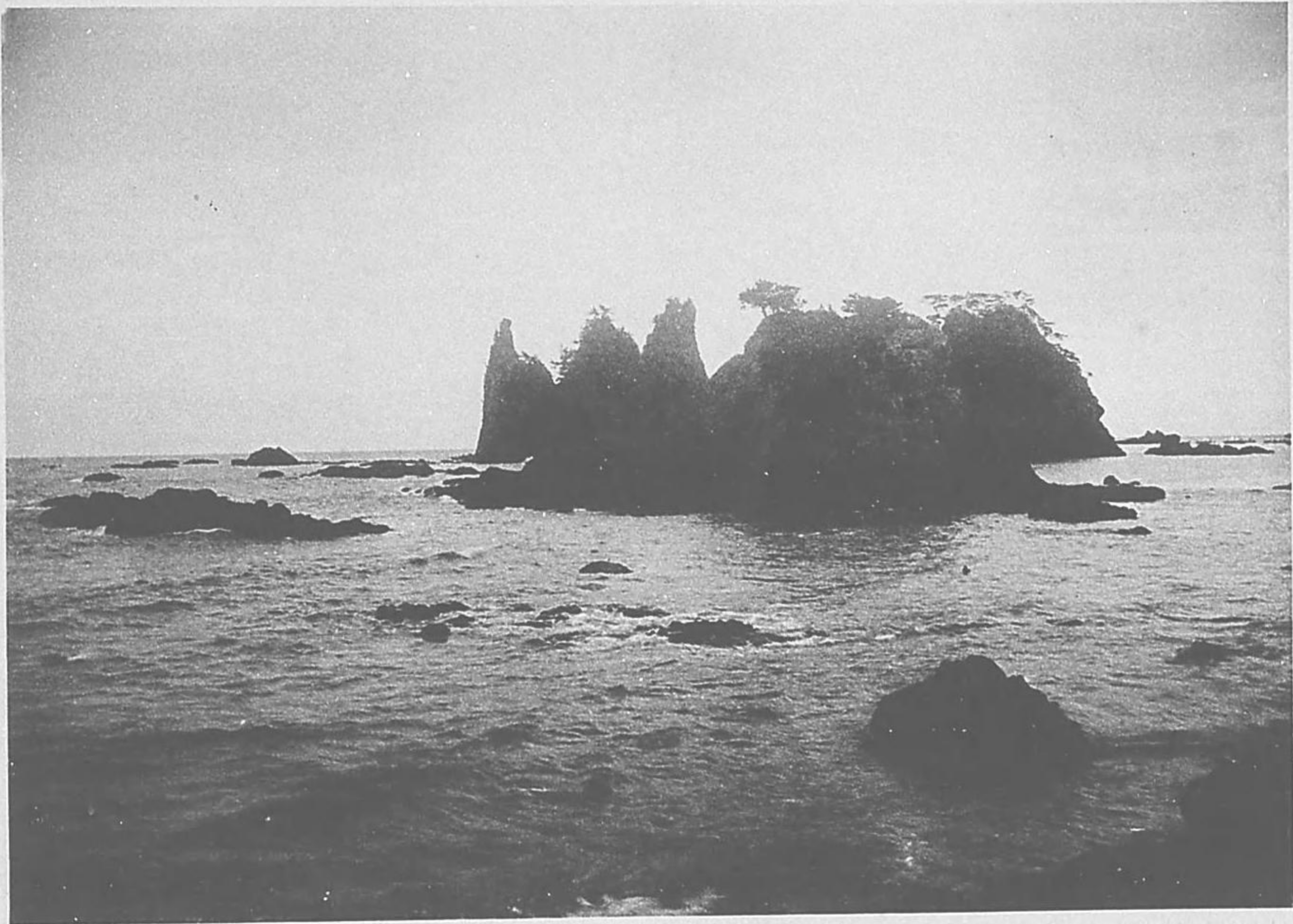
たる奇石と眺めて

盆石の

風にくづれず

夏座しき

此座敷は誰家の奥の間
にか其主人も知らず



石廊権現

海中に突屹せる岬上に

鎮り座す石廊権現神

威嚴然たり

うなばらや

みさきの山に

ミママリし

神の御いっぞ

たふと

かりける



戸田御濱海水浴場

戸田灣は入口狭くして
灘の如くなれば潮水澄
みて最も浴するに適せ
り旅舎には常に漁舟を
備へ浴客をして随意に
釣魚の遊をなさしむ且
沼津より下田間往復の
汽船一日に三回此港に
寄るを以て甚便よし



戸田御濱海岸

海水浴の暇に濱邊を散歩
して麗しき貝石など拾ふ
は目馴れずめづらし其都
人等がなりふり物言ひを
此所の蟹の子どもは又め
づらしこや見聞くらん





御濱海岸より
富士岳を望む



御濱は戸田の港灣に
斗出せる小半島にて
老松林をなし怪岩岸
に起伏す北方には富
岳遙に聳ゆる其裾は三
保の松原に連り天然
一幅の畫圖を看るに
似たり

下田港

下田は伊豆の國賀茂郡の

南端に在り東京及

び駿河の沼津清水

等より汽船往來し

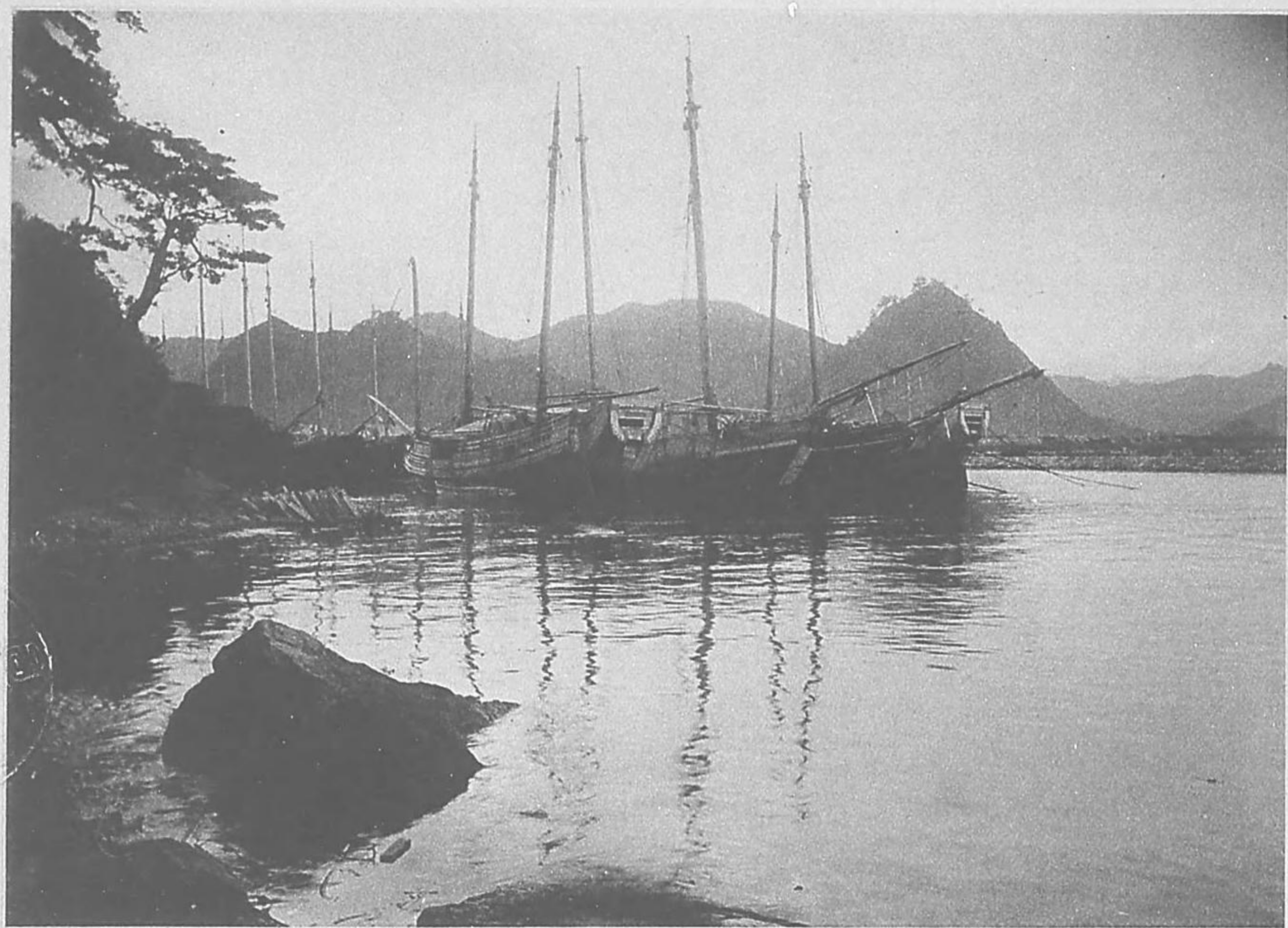
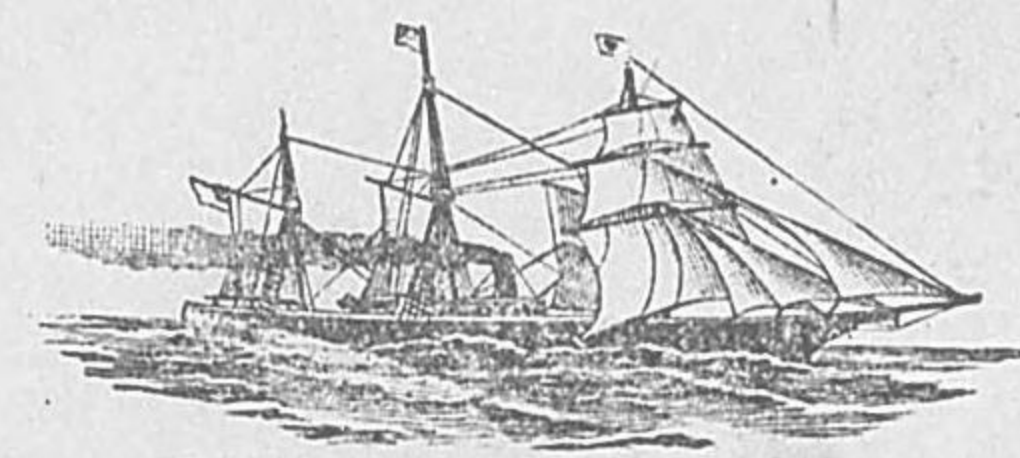
物貨日々に輻湊す

るを以て商業頗る

殷盛戸口年を追ふて加は

り伊豆第一の良港と稱す

べし



28/6/04

明治卅五年三月十日印刷

(旅の家土産第四十三號)

明治卅五年三月廿五日發行

(非賣品)

發行兼印刷者

八木富次

神戸市北長狹通五丁目四十六番地
光村利澤方寄留

發行所

光村寫眞部

神戸市北長狹通五丁目四十六番地

印刷所

光村寫眞製版部

神戸市北長狹通五丁目四十六番地



8
332



8
522

終